

大学時報

University Current Review

特集 「生活の場」から「人材育成の場」まで—進化する「寮」の目指すもの



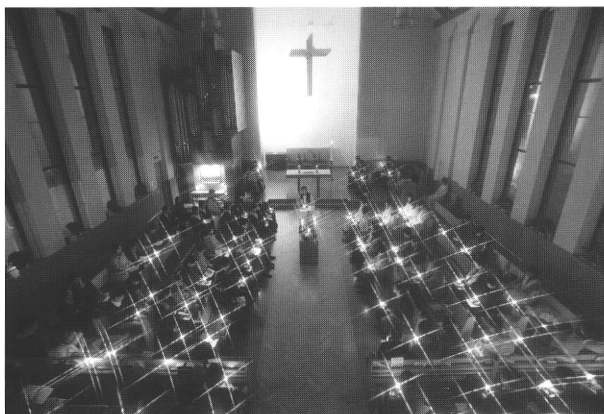
No. 357 Jul. 2014

日本私立大学連盟

<http://www.shidaiaren.or.jp/activities/daigakujihou>



全長6.3m、横3m、奥行き4m。合わせて938本のパイプが中に並んでいる。



12月に行われるクリスマス礼拝

チャペル（聖救主礼拝堂）のパイプオルガン

本

学のパイプオルガンは、開学三〇年記念事業の一環として、一九九〇年一二月、登美丘キャンパスに建設されたチャペル（聖救主礼拝堂）に設置された。イギリス・ロンドンのマンダー社で一年をかけて製造され、一度解体して船便で神戸港まで搬送、それから組み立てられた。同社の日本第一号のパイプオルガンとなった。

そして一九九五年、現在の和泉キャンパスへの大学移転とともにパイプオルガンも移設されることになった。パイプオルガンという楽器は建造物に値し、一度設置されればめったに移動はしない。本学のパイプオルガンは、設置されて五年で「引っ越し」を体験することになった。

現在、パイプオルガンが設置されているチャペル（聖救主礼拝堂）では、キリスト教センターを設置し、「建学の精神に基づき、大学におけるキリスト教活動全般を推進し、大学の発展のために努力する」ことを目的とし、「キリスト教精神に基づいて人格を陶冶し、世界の市民として広く国際的に活躍しうる人材を養成」するための学内諸活動の一翼を担っている。「キャンパスライフの活性化のために」というキャッチフレーズのもと、チャペルを拠点として、礼拝はもちろんのこと、本学の専属オルガニストによる演奏や、外部から演奏者を招き年に四、五回実施されるチャペルコンサート、学生が自由に参加できるパイプオルガン講習会など、さまざまなプログラムを行っている。

時

に荘重に、時に柔らかく温かに奏でられるパイプオルガンの調べは、今も変わらず、聴く者の心に深い感動を与え、大きな安らぎと励ましをもたらしている。

大学時報 目次

No. 357 Jul. 2014

巻頭言

創立五〇周年と不易流行／木船久雄

心の時代、心の教育

飯降政彦

10

座談会

学校法人会計基準のこれまで、そしてこれから

——私立大学の説明責任及び経営にもたらす影響を考える

奈尾光浩／田辺和秀／山本尚明／片山 覺／(司会)西野芳夫

《座談会特別寄稿》

学校法人会計基準のこれまで、そしてこれから

——改正が学校法人経営にもたらす影響を考える

田辺和秀

32

学校教育法及び国立大学法人法の改正について

白井 俊

98

高大一体の教育改革と達成度テストを巡って

——私立大学の立場から

松本亮三

108

特集

「生活の場」から「人材育成の場」まで——進化する「寮」の目指すもの

多文化共生の「寮」をデザインする

——APハウスの未来(立命館アジア太平洋大学)

今村正治

38

引き継がれる自治の精神

国際学生寮WISHにおける人材育成

——早稲田大学中野国際コミュニケーション・インテイク国際学生寮での事例から

古沢希代子

44

葛山康典

50

多世代との絆を実感できる学生生活

——春日部市官学連携団地活性化推進事業

森田貴実香

56



〈表紙〉
 制作者名：大庭英治（日本大学芸術学部教授）
 作品名：景
 制作年：2014年
 寸法：14×18センチメートル（F0）
 技法：水彩画

民間経営の学生寮が目指すものとは

——学生寮に求められる新しい形

教育寮「チエルシーハウス」の始まりと未来

金丸圭介

60

明日への試み

福岡女学院大学国際キャリア学部

グローバルに活躍する女性リーダーの育成

細川博文

118

特別連載

高校はう——これからの高大接続 連携を考える 大阪府編

大阪府における「活力あふれる府立高校づくり」と「高大接続」

柴 浩司

76

学びの創造「探究ナビ」

坂井啓祐

80

探究的学習において求めたい高大連携のあり方

原田恵子

86

SELHiとSSHの経験から考える

林 伸一

90

SGH校・大阪府教育委員会との高大連携と入試改革

——国際化に重点を置く大学として

尾木義久

94

すいそ

仏教思想と人材育成

古河良皓

72

私の授業実践——教育現場の最前線から

学生に学ぶ講義運営——学生の「気づき」を引き出す

橘 隆一

111

わが大学史の一場面——日本の近代化と大学の歴史

私学としての再出発と大学開学

井上寿一／桑尾光太郎

124

加盟校の幸福度ランキングアップ（ドラマ・映画ロケ地編）

大学がドラマ・映画のロケ地となる理由・文教大学

小林真詩

130

学外者から見て、魅力のある大学を目指す・実践女子大学

奥島尚樹

132

大学の撮影利用と広報施策への活用・東洋学園大学

相川徹人

134

クローズアップ・インタビュー

株式会社つ・い・つ・い代表取締役 遠藤貴子さんに聞く

（聞き手）山岡三子

136

新会員代表者紹介

宮城学院／根津育英会武蔵学園／清泉女子大学

144

新学長紹介

仙台白百合大学

145

大学点描

名古屋学院大学

THESAURUS UNIVERSITATIS だぶだぶのたがひ

桃山学院大学

木村久雄 名古屋学院大学学長。早稲田大学大学院商学研究科博士課程前期修了。国際貿易論を専攻。名古屋学院大学教授、経済学部長等を経て、11より現職。

飯降政彦 天理大学学長。66慶應義塾大学文学部卒。91天理教海外部長、学校法人天理大学理事。98宗教法人天理教代表役員、05社会福祉法人天理総裁。10より現職。

奈尾光浩 有限責任監査法人トーマツパートナー。早稲田大学商学部卒。10日本公認会計士協会学校法人委員会委員長(7月末まで)。共著「会計処理ハンドブック」他。

田辺和秀 日本私立学校振興・共済事業団補助課長。私学経営情報センター経営支援室室長、文部科学省高等教育局私学部参事官付専門官を経て、14より現職。

山本尚明 慶應義塾塾監局経理部部长。78慶應義塾大学経済学部卒。慶應義塾に入職後、94経理課長、04慶應義塾ニューヨーク学院(高等部)事務長等を経て、12より現職。

片山 寛 早稲田大学名誉教授。72早稲田大学大学院商学研究科博士課程単位取得退学。公認会計士第二次試験委員、本連盟財政政策委員会委員長等歴任。共著「入門会計学」他。

西野芳夫 関東学院大学名誉教授・本連盟経営委員会委員長。68中央大学大学院商学研究科修士課程修了。関東学院大学経済学部教授、常務理事歴任。主著「入門複式簿記」他。

今村正治 立命館アジア太平洋大学副学長。学校法人立命館常務理事。81立命館大学文学部卒。14より現職。共著「多文化社会への道」。

古沢希代子 東京女子大学現代教養学部教授、学生委員長。専門はジェンダーと開発。共著「Confronting Land and Property Problems for Peace」他。

葛山康典 早稲田大学社会科学部教授。早稲田大学大学院理工学研究科博士課程修了。

博士(工学)。07学生部副部長、10レジデンスセンター長を務め、現在に至る。

森田貴実香 春日部市総合政策部政策課政策推進担当(かすかべ未来研究所)。

金丸圭介 (株)共立メンテナンス事業企画部部长。共著「NPO法人NEWVERY理事」

山本 繁 NPO法人NEWVERY理事長・日本中退予防研究所所長。02慶應義塾大学卒。中央教育審議会臨時委員。主著「つまづかない大学選びのルール」他。

古河良皓 立正大学学園理事長。立正大学大学院文学研究科修士課程修了。仏教学専攻。80日蓮宗常圓寺住職。05学校法人立正大学学園評議員就任、12より現職。

柴 浩司 大阪府教育委員会事務局教育振興室高等学校課首席指導主事。85京都工芸繊維大学工学部卒。85府立清友高等学校教諭。06より教育委員会事務局に従事。

坂井啓祐 大阪府教育センター附属高等学校長。80大阪市立大学理学部卒。

原田恵子 大阪府立北野高等学校校長。12放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了。77大阪府立高等学校教諭、10大阪府教育センター教育企画部長等を経て現職。

林 伸一 大阪府立千里高等学校校長。78関西学院大学文学部卒。大阪府教育委員会事務局高等学校課参事等を経て現職。

尾木義久 関西学院大学スーパーグローバルハイスクール支援担当(特命)。88関西学院大学法学部卒。93同学院入職後、学長室学部長等設置担当を経て、13より現職。

白井 俊 文部科学省高等教育局大振興課課長補佐。東京大学法学部卒。コロンビア大学ロースクール修了。法学修士。徳島県教育委員会教育総務課長等を経て、12より現職。

松本亮三 東海大学観光学部長。本連盟教育研究委員会委員長。77東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。専門は観光人類学、文明学。アメリカ大陸の先史学。

橋 隆一 東京農業大学地域環境科学部准教授。04東京農業大学大学院農学研究科修了。博士(林学)。長岡技術科学大学環境・建設系研究員等を経て現職。

細川博文 福岡女学院大学国際キャリア学部教授。08オックスフォード大学大学院教育学研究科修士課程修了。応用言語学専攻。14より国際キャリア学部学部長。

井上寿一 学習院大学学長。一橋大学大学院法学研究科修士課程単位取得退学。法学博士。学習院大学法学部長等を経て、14より現職。主著「戦前昭和の国家構想」他。

桑尾光太郎 学習院アークイブズ職員。学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位取得退学。日本近現代史専攻。「学習院大学五十年史」編集を担当し、11より現職。

小林真詩 文教大学学園法人事務局広報マーケティング室課長。89文教大学教育学部卒。

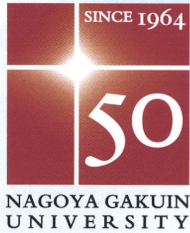
奥島尚樹 実践女子学園総合企画部部长(地域連携室室長)。84東京理科大学工学部II部(経営工学科)卒。実践女子大学事務次長、実践女子大学事務部長を経て現職。

相川徹人 東洋学園大学広報室部長。85成城大学経済学部卒。マーケティング専攻。

遠藤貴子 株式会社つ・い・つ・い代表取締役。恵泉女学園大学文学部卒。卒業後は銀行、不動産会社等を経て、08に同社を起業。現在は海外へも輸出している。

山岡三子 フリーアナウンサー。学習院大学卒。立教大学大学院二世紀社会デザイン研究科博士後期課程修了。博士(社会デザイン学)。名古屋短期大学客員教授。

大学点描



LOOK
FORWARD

未来をともに進もう。



2014年 創立50周年

 名古屋学院大学

立 50 周年

他者に優しくあれ、それが自らの人格陶冶と人類の平和や福祉をもたらす。

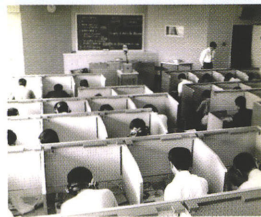
1968

瀬戸学舎への
全学移転



1980

L・L
(Language Laboratory)
授業の開始



1966年に新たに商学科を開設し、1968年より全学を瀬戸学舎に移転。またアラスカ・メソジスト大学 (AMU)、アラスカ州立大学などとの国際交流も順調に進み、1980年には外国語教育研究センターや情報処理センターを開設するなど開学以来重視してきた外国語教育や情報教育に力を注ぎました。

2007

名古屋キャンパス
開設



大学の前身である愛知英語学校創立から数えて120年となる2007年、名古屋学院誕生の地である名古屋市中心部に新キャンパスを開設し、瀬戸キャンパスとともに名古屋学院大学の新たな歴史が始まりました。

瀬戸キャンパス 体育館リニューアル

大規模な施工により、授業等教育の場ではもちろん、これまで以上に地域・社会貢献の拠点としても活用。



50周年記念棟「希館」建設中

学生支援の拠点となる教育学習センター・学生支援センター等を集約した新棟を建設。(名古屋キャンパス内 2015年1月完成予定)



2014年 大 学 創

建学の精神「敬神愛人」～Awe to God, Love to Humankind～

神をおおぎ謙虚に隣人を愛せよ 学ぶものも教えるものも謙虚であれ、

1887

受け継がれる
創立者クライン博士の志



1964

大学開学



名古屋学院大学の歴史は、アメリカ人宣教師フレデリック・C・クライン博士が1887年に創立した愛知県初のキリスト教主義学校の私立愛知英語学校に端を發します。その後、名古屋中学校、名古屋学院高等学校へと発展を遂げ、1964年に名古屋学院大学が経済学部経済学科の単科大学として誕生しました。クライン博士の掲げた建学の精神「敬神愛人」は今もしっかりと息づいています。

1983

瀬戸キャンパス
チャペル献堂



1989

創立25周年
外国語学部開設



開学20周年記念としてキリスト教主義大学の象徴であるチャペルを献堂。1989年には、クライン博士によりキリスト教の伝道と英語教育を目的に開設された愛知英語学校の伝統をさらに具現し、中部圏における地域社会の国際化への貢献も視野に外国語学部と留学生別科を開設。これ以降6学部10学科を擁す大学へと発展、大学院を設置するなど教育・研究体制の充実をはかってきました。

2014

大学創立50周年



2014年大学創立50周年をむかえ、これまで築いてきた伝統を受け継ぎながら次代へ向かってより充実した教育環境を整備。2013年法学部を開設、2015年4月には「現代社会学部」「国際文化学部」「こどもスポーツ教育学科(スポーツ健康学部)*」の新たな学びのフィールドが誕生予定です。 ※設置認可申請中

チャレンジできる大学

育む

真の
国際人の育成

豊富な国際交流と留学機会:

世界82大学と協定

i-roungeでのキャンパス内国際交流

充実したキャリア教育や資格講座:
入学直後からの積み上げで大学生活の
活動をすべてキャリアにつなげる

拓く

未来の
可能性の開拓

磨く

自ら学ぶ力の
向上

多彩な能動的・実践的学び:

カフェ & ベーカリー「MilePost(マイルポスト)」の運営、

学生支援センター「S-Platz」被災地支援ボランティアなど

講義で得た知識を活用するアクティブラーニングの実践

独自のネットワーク(CCS)による多面的なサポートを実現。
自分の可能性に気づき歩み出す学生に力を添えています。

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択

2013年度から開始された「地(知)の拠点整備事業」に選定され、その象徴として立ち上げたのが「プロジェクト&N(アンドエヌ)」です。大学のある名古屋市・瀬戸市と連携して「地域商業」「歴史観光」「減災福祉」の3つのアプローチで、学生・教職員一丸となって地域を盛り上げます。学生は地域について学び、積極的に活動することで人間的に成長し、地域には活力が生まれる、そんな魅力的な事業を今後さらに展開していきます。

PROJECT &N

NGU 名古屋学院大学

<http://www.ngu.jp/>

名古屋キャンパス

白鳥学舎 〒456-8612

名古屋市熱田区熱田西町1番25号

日比野学舎 〒456-0062

名古屋市熱田区大宝三丁目1番17号

瀬戸キャンパス

〒480-1298 愛知県瀬戸市上品野町1350

大学時報

2014・7

第357号



創立五〇周年と不易流行

木船 久雄 ●名古屋学院大学学長

創立五〇周年を迎えた。この間、一九六〇年代に大学拠点を郊外に移しながら、七年前に都心に回帰。船出は単科大学であったが、今では六学部一〇学科を擁し、来年はさらに二学部が加わる。これを機に「中長期計画」を策定し、教育改革や組織改革に邁進する。大学に限らず持続可能な組織とは、変化をいとわないことであろう。しかし、変えてはならないこともある。建学の精神や学則第一条にうたわれる教育目的だ。とりわけ私立大学は、その理念や目的に示された志のために存立するのだと思う。

心の時代、心の教育

飯降 政彦 ● 天理大学学長

一 心の背景にある宗教

今の時代は、「宗教」を抜きには語れない。

一般的に、二〇世紀は「モノの時代」、二一世紀は「心の時代」とよく言われる。

近代以降の科学技術のすさまじい発展の成果とは裏腹に、人類は環境汚染、温暖化、自然災害などの地球規模の危機、さらには国家や地域、民族や宗教の間での争い、テロの横行など、人間相互の関係における不信の増大が加速している。モノ・カネが人間の、人類の幸せをもたらす絶対のものという考えが一般的であり、とりわけ戦後の日本においては、そのモノ・カネの充足を求め、まっしぐらに時代を生きてきた。しかし今や、モノ・カネによってたらされると思われてきた幸福感が根底から大きく覆され、物質的な豊かさのみでは決して真の平和には到達しないという確信が強まっている。

それゆえに、今世紀のテーマは「心」であるといふことが、徐々に浸透しているのであろう。今求められるのは物質的な豊かさではなく、精神的な豊かさであることに多くの人々が気づき始めている。

二一世紀に入って、国際社会においては一層「共生」や「協調」というキーワードを軸に、過去の闘争の歴史と決別し、お互いの立場やものの考え方を理解し、支え合っていくことの大切さが強調されている。これまで人類が生きてきたどの時代よりも、平和という言葉が声高に叫ばれ、それを模索する会議や集会が世界中で開かれている。

ところが、そのような努力とは裏腹に、それを突き詰めていけばいくほど、この地球上で人間相互が協調し、自然環境も含めた共生を成就することの難しさをあらためて痛感させられている。平和という言葉を叫べば叫ぶほど、皮肉にもそこから離れていく現実がある。



平和を求める歩みが続けていくことは大切であるが、そこに人間の行動の基となるもの、考え方の根底にあるものを謙虚に探求することが必要である。それぞれの心の背景を求めていけば、例外なく宗教に行き当たることになる。心の時代を織り成す重要な糸は、宗教にはかならないのである。

二 豊かさを推し量るもの

モノ・カネがあふれる状況になり、物質的に何の不自由もない環境が整ったとしても、それがイコール心の充足をもたらすものではないということ、特にわれわれ日本人は、戦後の経済成長を経て今日に至る時代の実体験から学びつつある。四苦八苦しで金銭や物質の山を築き上げて、一瞬つかみ得たかのように思えた満足感は、次なる欲求を誘発し、さらに大きなモノ・カネの山を追い求める。物質文明を支える基盤は、まさに人間の欲求を際限なく膨らませていく歩みであったと言っても過言ではないだろう。おそらく、これから社会の開発が進み、生活水準が勢いよく上昇していく国や地域においても、日本をはじめとする先進地域の人間が経験した歴史を繰り返していくことであろう。

反復するが、心の充足がなければ、真の平和と安

寧を実感することは不可能である。モノ・カネではつかみ得ないものがある。それを証明するのが、まさに現在の日本の有り様である。

そこで心の問題がクローズアップされていく。その心を扱うのが宗教である。したがって、心の充足をテーマに掲げる宗教というジャンルを無視して、人類の真の幸福、真の平和は語り得ないということになる。実際に、人類のどの文明、どの文化においても、その底流には宗教、または宗教性があることは周知の事実である。

自分自身の文化の背景にある宗教を学び、知識をもち、理解をすることは、他の文化や価値観を理解し、尊重していく第一歩となる。昨今、さまざまな場面で耳にするようになった「グローバル・マインド」は、その積み重ねの上でできあがっていくものである。そのためにも今、そしてこれからの時代においては、何ごとも宗教を抜きにしては語り得ない。

三 宗教間対話の取り組み

そのような中で宗教界では、人類の歴史において幾多の戦争の背景をなしてきたのが宗教間の対立であったことの反省に立ち、さまざまな形、場面での宗教間対話が展開されている。

それらの対話の代表的なものの一つとして、カトリック教会の在家団体・聖エジディオ共同体主催による「諸宗教平和の祈りの集い」が毎年ヨーロッパの主要都市を会場に開催されており、一九八七年より、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、仏教、ヒンドゥー教などとともに、本学の創設母体である天理教からも代表団を送っている。また、一九七〇年より、「世界宗教者平和会議」の世界大会が各地で開催され、ここにも世界のさまざまな宗教団体の代表が参加しているが、京都においても過去二回、世界平和を念頭において具体的なテーマのもと議論が交わされた。

私は、前職の天理教代表役員の立場を含めて過去に数回、この「集い」、そして「会議」に参加した。それぞれの教義が絶対であり、他を受け入れる余地がないと主張し続けてきた多くの教団・宗派の代表が一堂に会し、お互いを理解し合うためにテーマを決めて対話を行うこと自体に大きな意義がある。しかし現実には、相互理解と真の協調に至る道のりは果てしないものである。ときに会場において、過去に大きく対立し、今なお両者が緊張関係にある宗教の代表者同士が激しく論じ合い、一触即発の緊張が会場を支配する場面にも遭遇する。それでもなお、地

道な努力の積み重ねが、やがては世界の平和、全人類がお互いを理解し、助け合う日につながるのと主催者の信念に賛同し、またその努力に敬意を表する宗教家、研究者がこの祈りと対話の集会を続けている。

天理大学学長として参加した二〇一〇年のバルセロナにおける「集い」において、私に与えられたテーマは「人間として生きることの価値」、そもそも人間は何のために存在しているのかということであった。その際、私は「天理教の教えにおいて、人間の存在する目的は人間を創造した親なる神の思いとして明示されている。教祖中山みきが説いた天理教の創世記には、親神様は人間を造り、その陽気ぐらしをするのを見て、共に楽しもうと思いつかれたとあり、陽気ぐらしとは、人間が神の恵みを受け、それに喜び感謝しつつ、等しく神の子、兄弟姉妹として助け合いながら生きる世界である。この陽気ぐらしの実現に向かって進む道こそが、神すなわち人類の親から与えられた命題であり、私たち人間の生きる目的であると信じている」という趣旨のスピーチを行った。

また、その前年のポーランド・クラクフにおける「集い」で私に与えられたテーマは「信仰と科学」

であった。ここで私は、「近代以降発達してきた科学文明は、人間が陽気ぐらしをするために神から与えられた知恵、文字を駆使して、人間が己の心を現実の世の中に表そうとしてきた軌跡であるが、本来は人間を創造された神の思いに即したものであったはずの心を、人間はそれぞれの生活環境の中で自分の身体という限定された範囲で心の自由を用いるうちに、我が身思案を先に立てて、自己中心的にこれを用いるようになり、神の守護を受ける感性を曇らし、やがては我と我が身、そして国や地域、地球規模の苦悩を招くようになってしまったのではないか」と指摘した。

真の平和社会を築くためには、^ル陽気ぐらし^シという人間存在の根本目的を見失うことなく、その実現に向かつて進むことのできる心を磨くこと、人間性を養うことが大切であると考ええる。この精神を世界に伝え広めるミッションをもって創設されたのが天理大学の前身、天理外国語学校であり、その建学の精神は現在に至り脈々と受け継がれている。

本学においては、自らの建学の基にあるものを学び、身につけることはもとより、己を知り、他の文化、価値観、そして異なる宗教や思想を研究し、理解していくことを非常に重要な教育の要素としてき

た。そのうえで、さまざまな場面を求めての「対話」を推進している。

本学の協定校であるドイツのフリップス大学マールブルクとは、二〇〇六年と二〇一〇年の過去二回、会場を天理、マールブルクと交互に移しながら、お互いの宗教を、または宗教を背景とした思想や文化をテーマに共同研究プロジェクトを実施した。本学からは宗教学科の教授陣を中心に発題を行い、双方の考え方を共同声明にまとめあげ、東西の価値観の理解に資する成果を世に発している。本年九月にもマールブルクにおいて第三回目のプロジェクトを「宗教と文化のマテリアリティ」という研究テーマに沿って開催予定である。ここでは、世界の諸宗教における図像や建築など、宗教や文化の事物とその意味を再検討し、そのことによって新たな宗教理解への地平を開くことを期している。

また、一九九八年と二〇〇二年には、本学とローマ教皇グレゴリアン大学を軸に、教育や家族、そして宗教をメインテーマに対話・シンポジウムを開催した。こちらも第三回目を二〇一六年にローマにおいて開催すべく準備を進めている。

お互いが相手の心の背景をなすものに近づき、学び、理解を深めたうえで、人類の平和に資するため

の協調を模索するこれらの取り組みは、地道にはあるが着実に成果を重ねている。

四 天理大学における三つの柱

天理大学は一九二五年、天理教の海外布教師養成を目的に、天理外国語学校として設立された。爾来、本学における八九年の歴史の中には、海外雄飛に必要な語学等の専門知識を習得する環境が整えられているという当たり前のあり方を追究しているが、その底流においては、当然のことながら「宗教性」という一本の柱を通してきた。宗教文化都市天理の雰囲気に含まれた本学は、宗教的情操を養う心の教育を大切にしてきたが、この「宗教性」という柱によって、第一に学生たちに強調してきたことは、お互いの心を大切にしよう、志を高くもとうということである。その中でも、最も崇高な志として、陽気ぐらし世界を建設し、真の平和世界を目指していくことを掲げ、使命感を高揚させている。

この「宗教性」から発展していく考え方として、「国際性」という、もう一つの柱がある。それは、世界中の人間は「一れつきょうだい」であるという考え方のもとに、異文化、他宗教に対する知識を持ち、自分との違いを理解し、尊重することができる

価値観と許容性を身につけることである。加えて、そのような土台の上に、自らを発揮していくあり方、つまり他国・異文化の世界に自らをぶつけていく、働きかけていくという能动性が重要である。本学創設以来、自己の足元（ローカル）に基軸を置きながらも、世界的視野（グローバル）を磨いていく「グローバル」という観点で人材育成を進めてきた。

そして、これら二つの柱の実践として、「貢献性」という柱を据え、人だすけ、他者への献身を推奨している。一九二五年の本学開校直後に発生した北但大地震に際して、授業を休講して本学第一期生が被災地に駆けつけ、支援活動を展開したことに始まり、その後も大学史の各所に貢献活動の歴史を刻んでいる。まさに近年盛んなボランティア活動のさきがある。

このたびの東日本大震災においても、貢献性の発露として、募金活動や被災地支援活動を教職員と学生が一体となり、本学の海外分校（ニューヨーク、パリ）からの参加者とも協力しながら実施している。また、インド西部大地震被災地やインドネシア・アス島の地震・津波被災地ほか、中国や東南アジア各地を訪れ、支援活動や道徳教育活動に取り組み「国際参加プロジェクト」、異文化理解と国際的視

野を身につけたスポーツ指導者を目指すためのドイツやカンボジアにおける「国際スポーツ交流実習」、その他、世界各地での海外インターンシップなどの科目も、年々内容を充実させている。

むろん、授業ばかりではなく、クラブ活動を通しての人間教育にも力を入れており、特にスポーツでは柔道、剣道、合気道、空手、弓道などの武道をはじめ、野球、ラグビー、ホッケー、サッカー、水泳、バスケットボール、バレーボール、ハンドボール、アメリカンフットボール、ソフトボール、テニス、バドミントン、アーチェリー、レスリング、卓球、陸上競技、体操、創作ダンス、テニス、馬術など、天理で盛んなスポーツは、この三つの柱「宗教性」「国際性」「貢献性」をベースに展開されており、また学生自治会や文科系・宗教系クラブ・サークルのあり方についてもしかりである。

五 おとぎ

さまざまな社会問題が生活のあらゆるところに根を張り、文明社会の弊害として将来に抱える課題が山積する中、それを乗り越えて明るく陽気な真の平和世界を築くために、一人ひとりの心を大事にする教育が一層重要になると痛感している。ことに、自

分自身というものを確立するためには、「拠り所」が必要である。

善悪が混濁したありとあらゆる情報と欲望がシャワーのごとく降り注ぐ現代社会にあつて、自分の主体をもたない人間が世の中を正しく生きていくことは至難である。科学技術のすさまじい発展の成果とは裏腹に、現在の人類が直面している地球規模の問題、また人間個々の関係不全による社会問題など、そのもとを突き詰めていけば、自分中心の、または自分の家族、自分の国、自分の民族の幸せのみを追い求めてきた人間の心のあり方にたどり着くのではないだろうか。昨今の日本における社会のひずみも、拠り所を失った人間個々の心づかいが投影されたものであることを謙虚に受け止め、自分の心のあり方、生き方を見つめ直さなければならない。

本学においては、建学以来の三つの柱を拠り所にした心の教育を一層推進することにより、志をもち、使命感を高揚させることに努めていきたい。これが本学の教育において学生たちに与える最も大切な付加価値である。専門知識、技術を身につけながら、己とは何かをつかみ、他者に心を致すことのできる人材をつくりあげていくことが、今求められる大学の教育の真価であると実感している。